

社会時計と自分時計

王雪純

「24歳、心臓病を患い、引きこもり、勉強以外のすべてに興味を持ち、すでに大学入試を6回受けて、学校の中で最高齢の学生だ」
このような人生シナリオを手にした時、あなたならこれからの人生をどのように選んでらう？韓国ドラマ「Reply 1988」の金正峰が出す答えは、好きなことは何でもして、食事をして、切手を集めて、放送局に手紙を書いて、ついでに7回目の大学入学試験を受けることだ。

24歳は人生の「標準」で考えれば、社会に出たり勉強したりする年齢であるとは言ってもない。人生の標準とは、卒業、仕事、結婚、出産、退職などの人生の決ま、た手順に沿って、社会の共通認識である「社会時計」を形成することだ。しかし、様々な理由で社会主流の軸からずれてしまう人もいる。時計からずれた人は、不安になるかもしれないし、金正峰のように楽しむかもしれない。

社会時計は、心理学者 Neugarten が提唱したものだ。Neugarten によると、同じ集団の人々は、いつ結婚すべきか、いつ就職すべきかなど、共有された社会時計で自分の生活を決めてゆく。人は本能的に自分の社会時計を他の人と比較して、自分が「正確で時間通りの人生を歩んでいるかどうか」を確かめる。社会時計という「年齢に応じて何をすべきか」という規範が私たちの文化には存在しているのだ。中国の孔子が「私は十五歳で学問を志し、三十になって独立した立場を持ち、四十になってあれこれと迷わず、五十になって天命をわきまえ、六十になって人の言葉が素直に理解でき、七十になると、思うままに振る舞って、道を外れないようになった。」と言ったが、それは古人の社会時計や人生に対する規範を反映している。

年齢の目盛りである「社会時計」には本来厳粛な威圧感はない。この時計は、人生の参考としての目安であって、固執する必要はない。

い。その時期はまだ来ていないということ
 人々に伝えようとしているにすぎないが、不
 安や危機感とは、「社会」と「時間」の矛盾が
 ら生まれる。「社会時計」という概念の純粋
 な意味は、「脱線」という重い意味を背負っ
 ているのである。

現在の中国の状況で言えば、若者は住宅購
 入や住宅ローンの負担を背負って、短期間で
 事業を立ち上げて、家庭を持って、出産する
 ということなどの「人生の大事件」を乗り越
 えることが期待されている。社会のフォー
 トトレランス（障害耐性）が低いので、多く
 の若者が、ミスをしてはならないとか、道を
 踏み外すと元に戻れないという重いストレス
 を受けることになる。自分自身による選択で
 はなく、「年齢に応じてこれをすべきだ」と
 いう文化の伝統、社会の期待などの圧力によ
 って前に進まなければならない。「社会の主
 流の軸からずれる」というのは決して簡単な
 ことではない。「社会時計」は人生の指標で

はあるが、ストレスの元であり、重い束縛ともなる。

自分の価値は外から証明されるものではないが、自分の価値を見出すためには、世界とのつながりが重要である。私は、できるだけ時計の指標に合わせて、大衆が望み、観迎する方向に向かっで進んでいる。私は踏み間違える恐れは持っていたが、挑戦する勇気も、失敗を受け入れる寛容さもなかった。今の私は指標の達成も、自己満足もしていない。見えない自分だけの道をたどって、自分の時計を探すべきなのかもしれない。この冬が終わったら、日本語の勉強を続けたり、英語の試験に備えたり、専門書を読んだりして、再出発するのかもしれない。最初からやり直したら、私が何を見逃し、何を経験し、何を得ることができるとは見当もつかない。しかし、そんな心配はどうでもいいのかもわからない。一番大事なことは私が立ち止まらずに歩き続けていることなのだろう。